

子どもの AI 使用についての提言

「子どもの AI 使用は、最大限に慎重にすべき」

2022 年に ChatGPT が公開され、だれもが AI を使える時代になりました。AI がなかった時には考えられないことが次々とできるようになり、AI を使えることの必要性が、発展しつづける IT 社会のなかでますます大きくなるであろうことは多くの人が感じていることと思います。パソコン学習で習得すべきスキルに「AI を使う力」という大きな項目が加わりました。

子どもたちに AI を使わせることについての議論が、さまざまなレベルで行われています。

AI 出現の前から子ども向けプログラミング指導をし、子どもたちが AI を使いはじめることで起きた変化を目撃してきた立場から、意見を述べます。

私は、AI を使うべきかどうかの判断基準は「**AI を使うことでより成長できるか、AI を使うことで成長をとめてしまうか**」ではないかと考えていました。

そして、その基準をもって現場で子どもたちを見つめてきた現在の結論は明確です。

「子どもの AI 使用は、最大限に慎重にすべき」です。

その理由を述べます。

AI を使用することで、簡単に問題解決ができます。問題解決に挑む過程は、だれにとっても負荷です。負荷は、ないほうが嬉しい。しかしその負荷は、子どもにとってかけがえのない成長のための原資です。

大きすぎる負荷は過大な疲弊を作りだし、「心が折れてしまう」ようなことを引き起こしたりもします。大きすぎる負荷を AI で軽減しスピーディに成果を出し、成果を吸収してさらに大きな課題に挑む、というサイクルを経て、高度な領域での成長を創り出すこともできます。これが、「**AI を活かして成長することができる**」状態です。

しかし、AI での問題解決の「負荷なく成果を得られた」という一面に魅了されてしまう子もいます。そうすると、その子は「負荷に耐えて問題解決に挑む」ことへの意欲をなくします。勉強してできるようになって、解決して喜んで、もっと勉強してさらに大変な問題を解決して、というサイクルでどんどん成長していた子どもが、ぴたっとそのサイクルを止めてしまう。

私は、AI を知った子どもがこのように「**成長を止めてしまう**」場面をいくつか目撃しました。砕けた表現で言えば、AI の使用を「**勉強しなくてもできるなら、勉強する必要ない!**」という体験として学習してしまうのです。この子なら AI をうまく使えるのでは?と思わせるような「よくできる子」にも、この望ましくない影響は残念ながら明確にあらわれました。

私の体験は、私の教室だけで起きていることか？

私のパソコン教室のジュニアプログラミング検定合格者はのべ 100 名をこえており、「検定取得レベルの PC スキルを持つ小学生が AI を知ることによってどのような変化をするか」を調べるには恵まれた環境だと思っています。私が目撃した子どもたちの変化が、私の教室だけで起きていることなのであれば、私の指導に起因することなので、私が自らの指導を改善することで避けられます。

私と近い見解を述べた記事が米国の心理学・精神医学メディア「Psychology Today」に 2026 年 3 月に掲載されました。タイトルは「大人は AI でスキルを失う。子どもはそもそもスキルを身につけない」。論旨はこうです。

大人が AI に思考を委ねるのは「筋肉の萎縮」で、使わなくなった能力が弱まるだけです。やめれば回復できる。しかし子どもが AI に委ねるのは「能力の閉鎖」で、「そもそも形成されるべき神経回路が作られないので回復できないかもしれない。」

この記事は査読付き学術論文ではなく、著者自身の考察です。

「そもそも形成されるべき神経回路」が「学習の成果」を意味し、「能力の閉鎖」が「学習することに意義を感じなくなり、勉強しなくなる」ことだと解釈すれば、この指摘は私の現場経験からの実感と大筋で合致しています。

私は、「能力の閉鎖」については「回復は可能」と考えます。経験を積んで「やはり勉強するしかないな」と考え直すことはできるからです。ただし、それまで数年～10 年以上かかってしまうこともあるのでは、と思います。最も成長が可能な年代を学習せずに過ごしてしまうという意味では、「回復ができない」ともいえるかもしれません。

国家レベル、企業レベルでも、同様の判断が見られます。

ノルウェーでは 2025 年、学力低下への懸念から、教育当局が**小学生（6～13 歳）への生成 AI 使用を認めない方針**を示しました。中学生（14～16 歳）は教師の監督下で限定的に許可、高校生（17～19 歳）は就職・進学を見据えて活用を学ぶ、という段階的な設計です。

また AI を開発・提供している企業自身も、利用者の年齢に明確な線を引いています。**Anthropic 社の Claude は 18 歳未満の使用を認めていません。OpenAI 社の ChatGPT は 13 歳未満を不可とし、18 歳未満には保護者の同意を求めています。**AI の性質を最もよく知る企業が、自らその制限を設けているという事実は、重く受け止めるべきことです。

パソコン以外の学習分野ではどうか

私の見解は、プログラミングやオフィスを子どもたちに指導するパソコン教室での体験から生まれたものです。他の学習分野での子どもの AI の使用についてはどうでしょうか。課題学習などで、AI を使うことは有効のようにも思えます。私には他分野についての回答を導き出せるだけの経験がありませんが、一度 AI を使いはじめたら「**AI を使うことでより成長できるか、AI を使うことで成長をとめてしまうか**」の後者の使い方を防げないように思います。基本的には AI 使用を教えず、学習に使用するとしたら保護者の管理のもとに限定するべきだと思います。

AI 教育の必要性

それでも、AI 教育は必要です。AI を活用できる人材の育成は、日本にとっても重要な課題です。

「AI を使ってより成長できる」状態での AI 使用は、成長を加速させます。AI を使って、世界を変えるイノベーションを創り出す人材を育成できるかもしれません。

私は、AI を使いこなすために必要な力は以下の三つだと考えます。

言語力（読解力・語彙力・表現力）

これが土台です。AI への指示は言語で行い、AI の出力も言語で返ってきます。語彙が貧しければ正確な指示が出せず、読解力がなければ出力の誤りに気づけません。さらに言語は思考の器でもあります。豊かな言語を持つ人は、考察そのものが深くなる。デジタル教育の先進国であったスウェーデンが、読解力や基礎学力の低下を受けて紙の本と手書き学習に回帰したのも、この土台の重要性を示しています。

論理力

言語力の上に乗るものです。問いを立てる、前提を疑う、目的と結果のずれに気づく。これがなければ AI の出力を鵜呑みにするだけになります。

IT の構造的理解

コードを書く力ではなく、システムがどう動いているかを知っている力です。ネットワーク、データの構造、ツール間の連携を理解してはじめて、「AI に何を頼むべきか」「AI の答えをどこに使うべきか」が判断できます。

この三つには順序があります。言語力なくして論理力は磨けない。論理力なくして IT の構造的理解は活かせない。そしてその先にはじめて、AI を道具として使いこなす力が生まれます。この 3 つの力を伸ばすことが、効果的な AI 教育になると考えています。そして、プログラミング学習こそが、この 3 つを伸ばす有効な方法です。プログラミングこそ AI が最も活躍するフィールドです。プログラミングスキルを高めることが、AI を使いこなすスキルに直結します。

社会への提言

私が教室で子どもたちにたずねた限りでは、多くの子どもが保護者の方から AI を教わっていました。「市の IT キャンプで AI を教わった」という回答もありました。私の体験が、私の指導によって引き起こされたことではなく、子どもに AI を教えることにおける本質的な問題であるとしたら？ 善意から教えた大人が、子どもの成長力を奪うことになってしまいます。

社会全体に向けてのこのような提言が必要です。

小学生の子どもに AI の使用を教えないでください。

保護者も、教育機関も、地域の IT イベントも、善意であっても同様です。子どもが AI を使えるようになることを急ぐことで、もっとも成長する年代の学習機会を奪うリスクがあります。

小学生より上の年齢については、その子の学習の状況や成熟度によって判断が変わります。しかし、小学生、とりわけ低学年の子どもたちへの AI 使用については、明確に慎重であるべきです。

すでに、子ども自身が AI にアクセスすることが可能な社会になっています。このリスクを防ぐことは、一つの教室での働きかけだけでは難しく、社会全体での認識の共有が必要です。

私の提言が子どもたちのためになるのか、あるいは的外れの不必要な制限なのか、多くの方々によって検証されることを望みます。この提言を問題提起として、子どもの AI の使用についてさまざまな意見が集約され、より高度な共通認識が形成されることを望みます。

一方、すでに思考力の基盤が形成されている大人は、AI で日頃の負荷を軽減し、より生産的な日々を送るべきです。シニアの方々も AI を使って不便をなくし、IT 技術発展の恩恵を存分に享受していただきたいです。

私自身も、この文章の情報整理や文章校正、論理の確認には AI を活用しました。しかし主張そのものは、長年子どもたちを指導してきた現場での経験に基づいています。私の提言が正しいかどうかにかかわらず、この事実だけは確かです。

子どもに必要なのは、「AI を使える子」になることではありません。

AI がなくても、自ら考え、試行錯誤し、成長できる子になることです。

その土台ができたとき、AI は初めて、その子の可能性を何倍にも広げる道具になります。

子どもと大人では、AI との向き合い方は根本的に異なります。この認識が社会に広がることを願っています。

参考資料

Timothy Cook M.Ed. 「Adults Lose Skills to AI. Children Never Build Them.」 Psychology Today, 2026年3月22日

<https://www.psychologytoday.com/us/blog/the-algorithmic-mind/202603/adults-lose-skills-to-ai-children-never-build-them>

Anthropic 「Minimum age requirement access restriction」 Claude Help Center (18歳未満使用不可)

<https://support.claude.com/en/articles/13117299-minimum-age-requirement-access-restriction>

OpenAI 「Terms of Use」 (13歳未満使用不可、18歳未満は保護者同意が必要)

<https://openai.com/policies/row-terms-of-use/>

ノルウェーの生成AI方針については、The Next Web、Engadget、TechRadar等の英語メディア報道(2025年)による。ノルウェー教育省の一次資料(ノルウェー語)は未確認。

<https://thenextweb.com/news/norway-bans-generative-ai-elementary-school-children>

提言者：株式会社オールアラウンド 長谷川浩二

島根県松江市東奥谷町 3-3

0852-28-3363

Mail:info@allaround.co.jp